

題 『ともし火』

テキスト：マルコによる福音書4章21～25節

親愛なる皆さん、おはようございます！

今日の聖書は、主イエスが神の国の秘密・奥義をたとえで語り教えておられる短い個所です。「ともし火」と「秤」（はかり）のたとえです。

聖書によれば、イエスさまは、ご自身神さまからこの世に遣わされたと自覚しておられたと思います。ですからご自身を遣わされた神さまを神の愛の国を伝えずにはおれなかったのです。伝える手段はことばと行いをもってです。ご自身を神さまの働きの「ともし火」として受け止めておられたのだと思います。今日の「ともし火」と「秤」のたとえは、約2000年前、当時のたとえでもあったようです。謎めいているので様々に理解できたようです。どこか謎めいて、秘密めいているのです。

21:また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。

イエスは自分を隠すことはできないことを告げられているのだとわたしは受け取りました。人が暗い中、ともし火、当時はもちろん電気などはなく、器に油を入れ、芯をつけて灯すことが多かったのです。

部屋に持って来るのは、物を量る升の下におくのも、寝るためのベットを置いた下に置くのでもない。そんなことをすれば部屋は明るくならない。そんなことをしては当然何の役にも立たないのです。

ともし火は見えてこそ周りを照らし、役にたつのです。あたりまえのことです。みんな知っているのです。ともし火としてのイエスは、神の秘密・奥義、救いの計画をこの世に実現するためにこられたのです。このことを隠すことはできないのです。

22:隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。

23:「聞く耳のある者は聞きなさい。」と。

イエスは神からのともし火です。イエスと共にある弟子たちもともし火なのです。わたしたちもイエスさまを知った者たちとして愛をこめて良いことは隠さず行っていけばよいのです。神さまはご存じなのです。

思い出すことばがあります。

ある時、イエスは弟子たちに言われました。

マタイ 4 章 14 節「14:あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができ

ない。

15:また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。

16:そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」と。

イエス・キリストが光であり、従おうとする者たちは、主イエスの言葉と愛に包まれて、すでにともし火の光を受けているのです。

ですからその光を隠してはいけないということだと受けとめるのです。

個人的なことですが、「22:隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。」という言葉で思い出すことができます。

実は子どもの頃、母親の財布から 10 円とったことがあるのです。

それを母に見つかったかどうか、はっきりした記憶はないのですが、悪いことをしたやましい気持ちはずっと残りました。

「人のものをとってはならない。」と母から聞かされていた言葉がわたしの心に残っていたのです。神さまはすべてをご存じで、いつか隠れていることをあらわにされるのです。ですから神を恐れ人を愛することなのです。

聖書では、イエスさまは、これから先を生きて行く弟子たちに気をつけるべきことを教えられました。

24:また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。」

聞くことに集中すること。何を聞いているかに注意することです。

そうしないと間違ってしまうのです。聞こうとする意志と見極める冷静さが必要です。人間は興奮状態になると間違いやすいのです。

最近、スコットランドで行われたサッカーのヨーロッパ選手権の試合を観戦した人たちが興奮状態になり、コロナウィルスに 2 0 0 0 人も感染しました。決して特別の人たちではなく、普通に生活している人たちだと思います。しかし興奮状態に陥ると考えられないような悲惨な状態になることがあるのです。

さて、24 節以下は、理解が難しく、様々に理解できる個所だと言われています。この個所は神の国を伝える弟子たちの宣教共同体、教会の姿勢として理解されたようです。

24: また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。

「あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。」

「秤」(はかり)とは原語のギリシア語では「メトロー」で、長さを表すメートルの原語です。長さだけではなく、容積にも使われることもあったようです。弟子たちがはかることは、弟子たち自身をもはかることになることを覚えておくことが必要だと。外部への宣教に関しては、外部の人たちを決めつけたり、偏見をもってはかるのではなく、むしろ自分たちの心、自分の考えや行動、神さまに寄り頼む気持ちなどなどを見つめ直す謙虚さを持つことが必要だと受けとめたいのです。

あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。

マタイ 7 章 1 ～ 2 節の主イエスのことばを思います。「人を裁くな。あなたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。」を思います。

「25: 持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」と。

今日の聖書の学びから教会の宣教の必要性和その時の心構えを思わされます。

讃美歌 469 番の 4 節には「輝かせよ 主のともし火、われらの闇の中に、望みを主の手にゆだね 来るべき時を待とう」とあります。

歴史を振り返る時、世界の教会の歴史にも良い働きも、また時には過ちも犯したこともあります。各教会においてもありえることです。個人個人においてもありえることだと思えます。しかし、憐み深い神さまの元に立ち帰って、つまり悔い改めて、主イエスの十字架のゆえに罪を赦され、解放され、繰り返し、繰り返し、何度でも愛なるイエスさまのことばを聞きながら生きて行けるのです。

主はわたしたちと教会の歩みを憐みを持って必ず導いてくださるのです。

◆「ともし火」と「秤」のたとえ

21:また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。

22:隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。

23:聞く耳のある者は聞きなさい。」

24:また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。

25:持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」